

## 景気先行きの不透明感を意識する中での米雇用状況 ~ 米雇用統計

2011年5月2日(月)

GW直後、というか、お休みを取っている人も多い5月6日。第一金曜日と言うことでいつも通り米雇用統計(4月)が発表されます。

4月26日、27日に行われた米FOMC(連邦公開市場委員会)では6月末が期限のQE2(量的緩和第二弾、11月から6月までに6000億ドルの国債購入)について予定通りの終了を確認。現状の政策金利については異例に低水準な現状を長期間据え置く方針をこれまで通り表明しました。

インフレは懸念する姿勢を示したものの(FOMC声明の中に、これまで無かった「インフレがここ数ヶ月で上昇」という表現が盛り込まれました)インフレの要因として指摘された原油高を含むエネルギー価格の上昇について、一時的で長続きしないと判断しており、こうした中身を受けて市場では米国の低金利政策が今後も当面は続いていくという見方を強め発表後からドル売りが加速する動きとなっています。

こうした状況をうけて発表される今回の雇用統計では米国の景気回復動向がかなりはっきりし、今後の楽観論が復活してくるような数字が出てこない限りなかなか大きな流れを作るのは難しいでしょう。

前回の雇用統計(3月)ではもっとも注目される非農業部門雇用者数(NFP)が前月比21.6万人増と、2月の19.4万人よりも強い結果に。事前予想は18.5万人増とやや弱まるとの見通しだったためそれなりに強い結果となりました。失業率も8.8%と2月の8.9%を下回る好結果。予想は横ばいで8.9%という見通しでしたのでともに好結果が出た形です。

前回はこの数字を受けてドル買いが優勢となりドル円が83円台から84円台半ば越えをつけるなどの動きとなりました。今回も好結果でて、米景気に対して再び楽観論が出てくるようだとドル安の流れに対する大きな牽制となってきそうです。

もっとも、今のところ予想はNFPが19.6万人増と、前回よりも増加幅がやや縮小という数字。原油高が個人消費を抑えているという見方が強く雇用市場も力強い回復とは行かないようです。

失業率も8.8%で横ばいの予想。失業率に関しては11月の9.8%から、4ヶ月で1%低下するというかなりのペースでの改善を示してきただけに、たしかにそろそろ一服といったところかもしれません。

予想通りの数字がでるとFOMCで示された先行き不透明感が継続し、ドル売りの流れも継続。

もし思いっきり弱めになると、ドル売りが加速といったところでしょうか。

予想以上、例えばNFPで25万人を超えたり、失業率が0.2%超の低下をしたりといった今後期待感を強く持たせるような数字が出ると次回のFOMCで出口戦略に向けて何らかの示唆という期待も出てくるかもしれません。

ISM景況感指数や、ADP雇用者数など、事前指標の動向などにも目を配りながら本番の金曜日を待ちましょう。